

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
設立50周年を迎えます

季刊

みる・きく・ふれる 文化財

おうみ文化財通信

46

vol.

Information of Cultural Heritage in OHMI

2020 Winter

【調査速報】

佐和山城下町のメインストリート発見－彦根市佐和山城跡－

【資料紹介】

渋沢栄一書跡「春花落尽」七言絶句 1幅

【開催報告】

「あの遺跡は今！ Part27」

【展示案内】

「琵琶湖文化館の『博物誌』－浮城万華鏡の世界へ、ようこそ！－」

【展示案内】

レトロ・レトロの展覧会 2020 特別陳列2 上砥山遺跡



【調査速報】

佐和山城下町のメインストリート発見

ひこねし さわ やまじょうあと

彦根市 佐和山城跡 —一般国道8号米原バイパス建設工事に伴う発掘調査—



現在の道路下から見つかった「本町筋」

(写真：滋賀県 提供)

佐和山城跡は彦根市北端部の佐和山丘陵にある城跡で、石田三成の居城としてよく知られています。その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には北近江の京極氏（のちに浅井氏）と南近江の六角氏との勢力の境目に位置したことから、「境目の城」として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく変わりますが、石田三成が城主の時期に城および城下町は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が敗れると、徳川家康の重臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年

(1604)、彦根城の築城に伴って廃城となりました。

当協会では、滋賀県および国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所からの依頼により、一般国道8号米原バイパス建設工事に伴う佐和山城跡の発掘調査を、平成30年度から実施しています。調査対象地の大半が城下町域に相当しますが、本年度の調査では城下町のメインストリートである「本町筋」の痕跡を検出するとともに、昨年度までの調査成果と合わせて考えることで、「本町筋」沿いに町屋が展開する状況が確認されました。【詳しくは次のページ】

彦根市 佐和山城跡 —城下町では珍しい胴木(どうぎ)が見つかる—

◆「本町筋」の痕跡

大手口から北へ約80mの地点で、「本町筋」の痕跡と考えられる幅60～90cmの盛土および硬化面が、南北約50mにわたって現在の道路の下から見つかりました。道路を敷設するにあたり、粘土を15～30cm盛った上から砂利を混ぜた土で締め固めて、路面となる硬化面を形成しています。西側面には石積みが設けられている状況も確認できました。東側は江戸時代以降、あたり一帯が水田化された際に大きく削平を受けていることから、城下町があったころの道路幅は不明です。



道路盛土の断面

◆石積みとその役割

道路は後世の削平を受け当初の姿をとどめていませんが、盛土の西側では南北約25mにわたって道路に伴う石積みを検出しました。幅15～25cm、高さ5～15cm、奥行き20～30cmの石材を積み上げ、道路側面を固めています。石材の大半は佐和山丘陵で産出するチャートでした。この石積みも水田化等の後世の削平によって大半の石材が失われており、残りのよい部分で2段分が残存していました。石積み本来の段数・高さは判然としないものの、路面の高さから考えれば、本来はもう1～2段分の石材が積み上げられていたと推定されます。



石積みの詳細

では、この石積みはこういった性格をもつものなのでしょうか。注目されるのは、盛土を横断する形で見つかった木樋もくひによる暗渠あんきょ(地下に埋設された水路)です。木樋を通った排水の流れる先が石積み部分にあたるため、今回見つかった石積みは側溝であったと推定されます。



盛土下部から見つかった木樋

◆城下町では珍しい胴木どうぎ

石積みの崩落を防ぐため、部分的に胴木と呼ばれる土台木を設置している状況も確認されました。胴木には丸太材を用いており、その外側にはほぼ等間隔で杭を打ち込み、ずれない工夫がなされています。織豊期の城郭石垣にはよくみられる構造ですが、同時期の城下町において見つかることは非常に稀であり、貴重な成果といえます。



胴木(どうぎ)の検出状況

◆今後の課題

この道路が敷設された時期は、現状では十分に把握できていません。硬化面を形成する土層や石積み直下からは16世紀後葉の瀬戸美濃焼の搦鉢片・小皿片などが出土しているため、その時期以降に道が敷設されたということは判明しています。16世紀後葉の佐和山城主を見ていくと、磯野員昌いその かずまさ、丹羽長秀にわながひで、堀秀政ほりひでまさ、堀尾吉晴ほりおよしはる、石田三成、井伊直政と目まぐるしく変遷しており、誰が城主の時代に道路が敷設されたのか、結論を得るにはさらなる検討が必要と言えます。

(写真：滋賀県 提供)



記者発表資料

渋沢栄一書跡「春花落尽」七言絶句 1幅（大正6年（1917）琵琶湖文化館蔵）

琵琶湖文化館といえば、国宝や重要文化財を含む仏像や絵画、美術工芸品などの文化財を収蔵する博物館というイメージがあるかもしれませんが、実は他にも様々な資料を収蔵しています。今回紹介するのは、「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一直筆の書です。

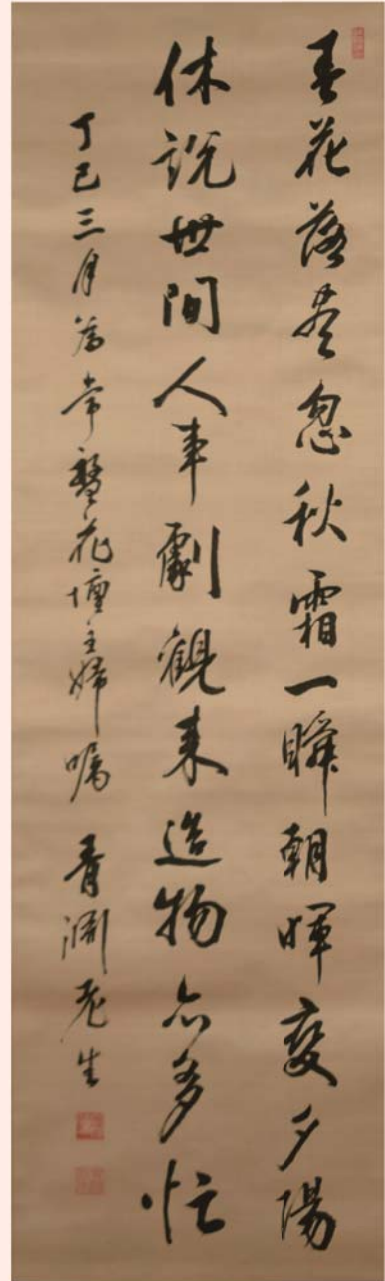
渋沢栄一(1840～1931)は経済人で、第一国立銀行(現在のみずほ銀行)や理化学研究所、東京証券取引所などを設立。一方で、幕末維新期には志士や官僚として活躍し、実業家として成功してからも寄付活動や慈善事業に尽力するなど、仁義道徳と経済の合一を信念として生きた人物でした。

この書は^{こうほん}紙本、すなわち光沢のある絹地に漢詩文を墨書したもので、七言絶句形式の自作詩を二行に分けて書いています。「青淵」は渋沢の号です。中国の古典をしっかり学んだ見事な書風で、筆鋒するどく緊張感をもって表現され、見る者に清澄な印象を与える佳作です。

春花落尽勿秋霜 一瞬朝暉変夕陽 休説世間人事劇 観来造物亦多忙
(大意) 春の花が落ちれば、たちまち秋の霜が置く。一瞬の朝日も、たちまち夕陽に変わってしまう。人間社会の出来事がはげしく目まぐるしいというのはやめてほしい。よく観てみれば、自然の事物も忙しく移り変わっているではないか。

見事に書かれた渋沢自作の七言絶句は、日本の近代化を肯定的にとらえる思いを自然に託したもので、とも解釈することができます。

今年ドラマの主人公となる渋沢栄一。2024年には新紙幣1万円札の顔となることも決定しています。本作品は滋賀県立安土城考古博物館で開催する「琵琶湖文化館の『博物誌』—浮城万華鏡の世界へ、ようこそ!—」に出陳されます(本誌4頁に展示案内を掲載しています)。この機会に、彼の人物像に迫ることのできる琵琶湖文化館所蔵の書跡にご注目ください。



滋賀県立琵琶湖文化館

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜地先
TEL. 077-522-8179 FAX. 077-522-9634
E-mail: biwakobunkakan@yacht.ocn.ne.jp
URL: http://www.biwakobunkakan.jp/



文化館 HP

【開催報告】 整理室公開事業・埋蔵文化財整理調査成果報告会

「あの遺跡は今! Part27 —親子でドキドキ?! “ヴァチャログ!?”で感じる考古学—

令和2年10月31日(土)・11月1日(日)に「あの遺跡は今! Part27」を開催しました。整理調査の成果報告会と滋賀県立安土城考古博物館内にある整理室の公開を目的に例年開催しているもので、出土品や写真パネルの展示、出土品の接合や実測などといった調査作業の公開などを行っています。今年には新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、回廊から「ガラス越し」に見学していただく方法で開催しました。出土品や作業の道具を実際に手に取ってもらうことはできませんでしたが、土器や瓦などの出土品や作業の様子を興味深く見学していただきました。



配布資料



【展示案内】滋賀県立安土城考古博物館 第63回企画展 琵琶湖文化館開館60周年記念 地域連携企画展

「琵琶湖文化館の『博物誌』—浮城万華鏡の世界へ、ようこそ!—

琵琶湖文化館が昭和36年3月20日に竣工・開館してから、60周年を迎えます。

県内初の本格的公立博物館として社寺などから文化財を受託するとともに、積極的な資料収集を行い多彩なコレクションを形成してきました。本展では、近年展示する機会が少なかった収蔵品の中からユニークで興味深い作品を公開し、収蔵資料の奥深い魅力に触れていただきます。60年間に集めた『博物』の万華鏡が、今こそカラフルな光を放ちます。



若返り地藏 森大造作



源平合戦図屏風(左隻) 狩野氏信筆

【開催期間】令和3年2月6日(土)～3月21日(日)

【開館時間】午前9時～午後5時(ただし入館は午後4時30分まで)

【休館日】月曜日(2月8日・15日・22日、3月1日・8日・15日)

【入館料】大人600(480)円、高大生360(290)円、

小中学生・県内高齢者・障害のある方は無料。

※()は20人以上の団体料金。

※「信長の館」との共通券 大人980円、高大生540円

やむをえず、会期を変更する場合がございます。最新情報は当館ホームページでご確認下さい。ご入館の際はマスクを着用し、手指の消毒にご協力ください。

滋賀県立安土城考古博物館

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦6678

TEL. 0748-46-2424 FAX. 0748-46-6140

URL : <http://www.azuchi-museum.or.jp/>



博物館 HP



湖魚図 吉田虎之助筆

【展示案内】レトロ・レトロの展覧会 2020 特別陳列2 上砥山遺跡

「川のほとりにて～甦る古代の文字と祭祀～」

栗東市中央部に位置する^{かみやま}上砥山遺跡では、平成30年11月から令和元年12月にかけて、国道1号栗東水口道路建設工事に伴う発掘調査を実施しました。調査では飛鳥時代から奈良時代にかけての川跡や掘立柱建物跡がみつかりました。とくに川跡から出土した遺物には、木簡を転用した^{ことじ}琴柱や^{ぼくしよどき}墨書土器といった文字資料や文字を書くための道具である^{すずり}硯のほか、^{とば}土馬などの祭祀にかかわるものも含まれていました。今回の展示では、これらの文字資料や祭祀遺物を中心に紹介していきます。



上：土馬
下：墨書土器「太」
(写真：滋賀県提供)

【展示期間】令和2年10月16日(金)～令和3年3月31日(水)

【開館時間】午前9時～午後5時

【休館日】土・日・祝日

【展示場所】滋賀県埋蔵文化財センター 1階ロビー

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2



開催案内